

## 総合講義「教職応用研究」の実践

牧原 勝志〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕・楠原 豊〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕

### Actual Performance for "Applied Teaching Studies"

MAKIHARA Katsushi・KUSUHARA Yutaka

キーワード：教職実践演習、教職応用研究、教員の資質能力、学校支援活動、課題追究

#### 1 はじめに

教職課程の認定を受けている大学では、教員として必要な資質能力の最終的な形成と確認を図るために、平成22年度から教育課程に「教職実践演習」が必修科目として位置付けられた。教職実践演習は、教職課程の他の科目の履修や教育課程外での様々な活動を通じて学生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され形成されたかについて大学・学生が最終的に確認し、将来教員になるために、自己にとって何が課題であるのかを学生自らが自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、定着させることにより、教職生活を円滑に始めることができるようにすることを目指したものである。この授業は、Ⅷ期（4年次後期）に設定することになっており、平成25年度後期にスタートすることになる。

本学では、教職実践演習と同趣旨の科目として、平成19年度に「教職応用研究」を位置付け、平成22年度から平成24年度までの3か年間は、教育課程上「総合講義」としての位置付けで開講し、必修科目となる平成25年度へスムーズに移行できるように段階的に取り組んでいるところである。

初年度となる平成22年度は、本学部で必修科目となる5コース・14講座の中からEコースを選んで授業構成を考え、学生の課題意識、課題解決の様相、協力校等との連携等その在り方を模索した。

本稿は、初年度後期授業を中心とした実践の様子とその成果や課題について報告するものである。

#### 2 「教職実践演習(教職応用研究)」の概要

課程認定大学である本学においては、教職実践演習は、教職に関する科目として、4年次後期に教育学部、法文学部、理学部、工学部、農学部、水産学部において、計10コース・19講座に分けて行われる。各コースの担当教員を中心に、各学部、附属学校、公立学校の教員等と協力して、教職履修カルテの把握を基に、演習内容の充実を図るものである。

教育学部では、育成すべき資質能力等に応じて、以下の5コース・14講座を設定している。

- Aコース：教員として、あるいは学校として、どのような活動をすべきかの検討を通じて、教職の理解・自覚を深める。
- Bコース：カウンセリングの進め方、いじめ問題や不登校への対応を中心に、生徒指導に対する構想力、学級経営力、家庭・地域との連携力、コミュニケーション力、自己改善力、児童生徒理解など、学級担任として必要な種々の力量形成を図る。
- Cコース：教科別に10講座を設け、授業設計や実際の展開・評価あるいは教材研究の在り方など、学習指導における力量形成を図る。
- Dコース：児童生徒の実態を踏まえた題材選定や活動計画の立て方やその運営など、教科以外の指導の力量形成を図る。
- Eコース：協力校におけるTA（ティーチング・アシスタント）など、継続的な観察・指導補助等の活動を通じて、教師としての全般的な力量形成を図る。

教職実践演習の実施に当たっては、以下のよう  
な点に留意して進める必要がある。

### (1) 授業の実施に当たっての準備事項

- 授業担当教員と、その他の教科に関する科目及び教職に関する科目の担当教員で教職実践演習の内容についての協議
- 入学の段階からそれぞれの学生の学習内容、理解度等を把握（教職履修カルテ）

### (2) 授業で扱う内容・方法

- イントロダクション・これまでの学修についての講義・グループ討論
- 教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責任等についてのグループ討論・ロールプレイング
- 社会性や対人関係能力（組織の一員としての自覚、保護者や地域の関係者との人間関係の構築等）についての講義・グループ討論
- 幼児・児童生徒理解や学級経営についての講義・グループ討論
- 学校現場の見学・調査
- 教科・保育内容等の指導力についての講義・グループ討論
- 模擬授業
- 資質能力の確認、まとめ

### (3) 補完指導

- 「教職履修カルテ」を活用し、個別に補完的な指導を行う

### (4) 単位認定

- 実技指導、グループ討論、補完指導、試験の結果等を踏まえ、教員として最小限必要な資質能力が身に付いているかを確認し、単位認定を行う。

## 3 平成22年度「教職応用研究」の実践

前述したように、本教育学部では、平成25年度後期からの本格実施を前に、総合講義としての「教職応用研究」を平成22年度から開講した。各講座の受講生数は15～20人程度で、受講生は5コースの中から、自己の課題等に応じて半期15回の授業の前半・後半で2講座を選択し、自らの課題追究に努め、必要な知識・技能を確かなものにしていくことになる。

平成22年度は、5コースの中のEコースについて半期15回を二つに分けずに、前・後期それぞれ15回の授業計画を策定し、授業実践を行った。以下、その取組について述べる。

### (1) 本科目の目標

自己の課題に応じ、協力校等（幼・小・中・特別支援学校等）における継続的な学校支援活動（学級担任補助や学習指導補助等）・観察やその省察活動等を行う中で、教職理解、学習者理解、教科領域等の内容理解を深めたり、自己改善力や指導の構想力、展開力、評価力等の向上を図ったりする。

### (2) 学修目標

（表1 教員として必要な資質能力に関するチェック項目【5カテゴリー19の資質能力】）

カテゴリー	具体的項目	内容
A教職の理解	1 教職の意義（使命感・倫理観等）に関する理解	教職の意義と役割を理解し、教育的愛情に支えられた使命感や職責感を持っている。
	2 教育の理念、制度、歴史等に関する理解	教育の理念を理解し、教育の制度や歴史・思想に関する基礎的な知識を身に付けている。
	3 教育方法に関する理解	教育方法の理論に関する理解を深め、複式指導や少人数指導、教材開発や活用、授業分析など、指導法や授業改善について理解している。
	4 学校経営およびその課題に関する理解	学校経営およびその課題（危機管理等）に関する基本的な知識を身に付けており、学校運営の在り方等について構想することができる。
B連携協力力、自己改善力の育成	5 協働実践力	集団の中で、役割に応じてリーダーシップを発揮したり、他者と連携・協力して活動したりできる。
	6 保護者・地域社会との連携力	学校と家庭や地域社会との連携・協力の在り方について、基本的な理解を深め、自ら連携・協力しようとする態度を身に付けている。
	7 コミュニケーション力	他者とのかわりや適切なコミュニケーションの在り方について基本的な理解を深め、自らそれを実践することができる。
	8 自己改善力	自らの課題を発見し、解決に向けた具体的な方法を企画・実践するとともに、結果を省察して改善につなげることができる。
C学習者理解	9 学習者の心理・発達に関する理解	子どもの発達や心理など、子ども理解のための基礎的な知識を身に付けており、それらを生かして子どもの発達を分析することができる。
	10 カウンセリングに関する理解	カウンセリングや教育相談についての基礎的な知識を身に付けており、それらの知識を学習者理解に活かすことができる。
	11 特別支援教育に関する理解	特別支援教育に関する基本的な知識を身に付けており、それを生かした具体的な指導・支援の在り方を構想することができる。
D構想力、展開力、評価力等	12 学級経営に関する構想力	学級経営の在り方に関する基礎的な知識を身に付けており、学級等の集団及び集団と個のかわりなどについて構想することができる。
	13 生徒指導に関する構想力	個々人の発達課題の把握や問題行動及びその対応等の理解を深めるとともに、積極的な生徒指導の在り方について構想することができる。
	14 教材分析力及び授業デザイン力	教材を分析する能力を身に付けており、教材研究にもとづいて授業をデザインすることができる。
	15 授業展開力及び授業評価力	基礎的な教育技術や教育評価について理解し、それを活かした授業実践と、授業の評価・改善を行うことができる。
	16 情報収集力、分析力、活用能力	情報を収集し、整理・分析することを通して、その情報を活用していくことができる。
	17 各教科等のカリキュラムに関する理解	教育課程及びその編成や学習指導要領について、基礎的な知識を身に付けている。
E教科領域等の内容理解	18 各教科内容の基盤的知識の理解及び技能の習得	教科内容の背景となる学問領域について、基盤的な知識や技能を身に付けている。
	19 道徳、特別活動、総合的な学習の時間等に関する理解	道徳、特別活動、総合的な学習の時間など、教科以外の教育活動について、その指導内容や指導方法に関する基礎的な知識を身に付けている。

前ページ表1に示す「本学部で設定した教員として必要な資質能力に関するチェック項目【5カテゴリー19の資質能力】」に照らしながら、これまで履修した授業や教育実地研究（教育実習）などの学修経験を踏まえ、学生自らが自己の課題を設定し、その達成状況を想定して自己の学修目標を具体的に設定する。

### (3) 授業計画

講	授業内容
1	○オリエンテーション、自己診断及び自己課題の設定 ・本科目の目標や活動内容等について知る。 ・これまでの教職に関する学びや教育実地研究等の取組を振り返ったり、19の資質能力に関する自己評価を行ったりして、自己課題の明確化を図る。
2	○本コースでの取組の視点の明確化及び計画立案 ・自己課題の解決法、学校支援活動の計画、最終の到達目標等を設定する。 ・課題や支援活動に着目しながら、小グループを編成し、グループの共通課題を設定する。 ・上記内容に関して大学教員と話し合い、活動内容等を仮決定する。
3 5 7	○学校支援活動①②③④⑤と課題の追究 ・協力校担当者との打合せによる活動内容・活動日や時間帯等を最終決定する。 ・実際の支援活動と課題追究を行う。
8	○学校支援活動前半の振り返り活動 ・グループ員や大学教員との学校支援活動に関するフィードバックを行う。 ・前半の支援活動を通しての自己・グループ課題の解決状況をまとめ、中間報告を行う。 ・後半の取組に関して見通しを持つ。(改善点、目標のより一層の明確化、活動の拡張等)
9 5 13	○学校支援活動⑤⑥⑦⑧⑨と課題の追究 ・中間振り返りを基にした学校支援活動。 ・それぞれの課題追究、ワークシート等へのまとめを行う。

14	○学校支援活動全体の振り返り及びまとめの活動 ・当初設定した到達目標に照らしながら、課題に対して明らかになったことや、今後課題として残されていることなどについてまとめる。
15	○学校支援活動の成果等の報告会 ・本科目の学修で得られた成果や今後の課題等についてまとめたことを全体（もしくはグループ）で発表する。 ・今後の取組について見通しを持つ。

### (4) 授業の実際

#### ア 平成22年度・前期教職応用研究

前期は、各附属学校（小・中・特別支援）に協力を依頼し、初めての授業に取り組んだ。また、これまで継続的に近隣の小規模小・中学校で取り組んでいるTA（ティーチング・アシスタント）の学生たちも集中講義等の形式で授業参加した。

講義は全15講（集中講義は3講；ここでは取組等の紹介は省略）とし、オリエンテーション等の事前指導（1～3講）と中間報告会（10講）と成果発表（15講）の5講分を学部で、残り10講分（毎週1回、半日～1日、個々の課題等に基づき支援活動を設定）を各附属学校等で実施した。学生たちは目標の時間（10講分）を大きく超え、20.4講分に該当する30.6時間（一人当たりの平均）を各附属学校での支援活動として実践に取り組んだ。さらに、中間報告会や成果報告会では事前指導の段階とは大きく変容し、主体的に活動したり、堂々と発表したりする姿が見られた。

また、各学生には自己課題と共通課題（各支援学校毎のグループ）をもたせるとともに、毎回、A4版1枚の報告書を作成・提出させた。その際には、活動内容や個々の反省・気づき、次時の計画などに加えて、活動中に気付いたり、見いだしたりした課題を発見課題と位置付け、記載させた。このように学生たちには、常に三つの課題を意識させながら解決・改善に取り組ませた。

評価は、目標に照らしてこれまでの学習に

よって蓄積された資料やワークシートの記述、学校（地域）支援活動や話し合い等の観察、中間・成果報告会の内容等により、量的・質的観点から判断し、評価した。

## イ 平成22年度・後期教職応用研究

授業担当者5名で前期の授業を振り返り、後期の授業運営について一部改善を図りながら取り組んだ。その詳細について、授業計画に従って具体例を挙げながら述べる。

### (ア) 第1・2講：授業オリエンテーション、課題把握の指導の充実

本科目の目標を達成する授業展開を進めるためには、学生自らが本授業の目的を適切に把握し、自らの課題を明らかにして学校支援活動に取り組む必要がある。その意味で第1・2講は、本授業にとって重要な位置を占めると考え、以下のような取組を行った。

#### ① 第1講授業計画

- 0 スタッフや受講者の確認
  - ・ 指導者の確認と指導意図等の理解
  - ・ 出席確認（登録の有無）
- 1 中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について（中間報告）」の理解
  - ・ 中間報告に至る経緯とその概要の把握
  - ・ 教職実践演習の新設・必修化の理解
  - ・ 教員として求められる資質能力の理解
- 2 「教職応用研究」意義の把握
  - ・ 本講義のねらい・位置付けなどの把握
  - ・ 試行の見通しの把握
  - ・ 本講義受講への意欲化
- 3 実践的教職科目及び教育実地研究等の振り返り
  - ・ アンケート回答による自己の取組の振り返り
  - ・ 19の資質能力等に関する自己診断
  - ・ 自己課題等の把握
  - ・ 学校支援活動に関する希望の確認
- 4 学校支援活動（基本計画）の策定
  - ・ 自己診断を基に学校支援活動のテーマを策定

- ・ テーマに基づき、具体的な学校支援活動候補を検討

#### 5 学校支援活動等に関する意見交換

- ・ 司会者の決定
- ・ 個々の活動案を発表
- ・ 相互の活動案についてインタビュー・アドバイス
- ・ グループ発表

#### 6 本時のまとめと次時の確認

- ・ 本時のポイントと次時の取組の確認
- 学校支援活動分担校及び担当教諭等の確認
- 詳細な活動計画の策定 他
- ・ 連絡方法、単位登録等の確認

上記授業計画において、1の教職実践演習についての説明の後に、2の本授業シラバス等の資料を基にした本年度の試行のねらいや附属学校とのかかわり、19の資質能力育成の必要性を理解させた。また、3では、所属や希望などをアンケートで把握し、グループ分け等の参考にするとともに、下記資質能力チェック表を使っ

教員として身に付けた資質能力のチェック表		実施日：平成22年10月15日（金）	
学部・学科（専修） [                      ]		氏 名 [                      ]	
※ 4：該当する 3：やや該当する 2：やや該当しない 1：該当しない			
<b>A 教職の理解に関する事項</b>			
1 教職の意義や役割を理解し、教育の愛情に支えられた使命感や職業感をもっているか。		4	3 2 1
2 教育の理念を理解し、教育の制度や歴史・思想に関する基礎的な知識を身につけているか。		4	3 2 1
3 教育方法の理論に関する理解を深め、複式指導や少人数指導、教材活用、授業分析などについて理解しているか。		4	3 2 1
4 学校経営やその課題（危機管理等）に関する基本的な知識を身につけており、学校運営の在り方等について構想することができるか。		4	3 2 1
<b>B 連携協働力、自己改善力の育成に関する事項</b>			
5 集団の中で、役割に応じてリーダーシップを発揮したり、他者と連携・協力して活動したりできるか。		4	3 2 1
6 学校と家庭や地域社会との連携協力の在り方について、基本的な理解を深め、自ら連携協力しようとする態度を身につけているか。		4	3 2 1
7 他者との関わりや適切なコミュニケーションの在り方について基本的な理解を深め、自らそれを実践することができるか。		4	3 2 1
8 自らの課題を発見し、解決に向けた具体的な方法を企画・実践するとともに、結果を省察して改善につなげることができるか。		4	3 2 1
<b>C 学習者理解に関する事項</b>			
9 子供の発達や心理など、子供理解のための基礎的な知識を身につけており、それらを生かして子供の発達を分析することができるか。		4	3 2 1
10 カウンセリングや教育相談についての基礎的な知識を身につけており、それらの知識を学習者理解に活かすことができるか。		4	3 2 1
11 特別支援教育に関する基礎的な知識を身につけており、それを活かして具体的な指導・支援の在り方を構想することができるか。		4	3 2 1
<b>D 構想力、展開力、評価力等に関する事項</b>			
12 学校経営の在り方に関する基礎的な知識を身につけており、学級や集団及び個人とのかかわりなどについて構想することができるか。		4	3 2 1
13 個々人の発達課題の把握や問題行動及びその対応等の理解を深めるとともに、積極的な生徒指導の在り方について構想することができるか。		4	3 2 1
14 教材を分析する能力を身につけており、教材研究に基づいて授業をデザインすることができるか。		4	3 2 1
15 基礎的な教育技術や教育評価について理解し、それを活かした授業実践と、授業の評価・改善を行うことができるか。		4	3 2 1
16 情報を収集し、整理・分析することを通して、その情報を活用していくことができるか。		4	3 2 1
<b>E 教科領域等の内容理解に関する事項</b>			
17 教育課程及びその編成や学習指導要領について、基礎的な知識を身につけているか。		4	3 2 1
18 教科内容の背景となる学問領域について、基礎的な知識や技能を身につけているか。		4	3 2 1
19 道徳、特別活動、総合的な学習の時間など、教科以外の教育活動について、その指導内容や指導方法に関する基礎的な知識を身につけているか。		4	3 2 1

た自己診断により、自己課題等を把握し、学校支援活動について第3希望まで確認させた。



そして、4 【写真1 自己課題の把握】の段階では、別途準備したワークシートの構成を解説し、学校支援活動のテーマや大まかな活動内容を策定させるようにした。(添付資料参照) また、後期授業開始前に、支援活動協力校となる可能性のある附属幼稚園・小・中学校・特別支援学校に事前の協力依頼をしておいたが、今回の受講学生の希望は、附属小・中学校の2校種のみであったので、この2校に分かれて学校支援活動を行う計画作りをさせるようにした。

## ② 第2講授業計画

- 1 課題意識をもつことの重要性の理解
  - ・ 三つの課題の違いの把握
  - ・ 三つの課題をもつことの重要性の理解
- 学校支援活動振り返りシートの活用についての説明
- 2 自己課題の確認
- 3 共通課題の検討とその決定
  - ・ 支援活動に関する不安・悩み・課題等についての意見交換
- 4 共通課題の共有、支援活動に関する意見交流
  - ・ グループで決定した共通課題や意見交換の状況を発表し合う。
- 5 本時のまとめと次時の確認
  - ・ 本時のポイントと次時の取組の確認

第2講の1では、「自己課題」「共通課題」「発見課題」の3つの課題の内容と、課題追究のために支援活動をすることの意義を解説した。そして、毎回の学校支援活動が終わるたびに記入して提出する「学校支援活動振り返りシート」(詳細は次ページ) 記入や活用の仕方等について説明した後、前回設定した自己課題の確

認と再検討・最終決定をさせた。以下が、学生の自己課題の主なものをまとめたものである。

- ・ 各教科の教材分析と授業デザイン
- ・ 教材研究の方法と授業展開の仕方
- ・ 学級経営の在り方、教科外教育活動の理解
- ・ 特別支援、道徳、特活、総合的な学習の時間の指導の在り方
- ・ 発達障害のある児童についての理解、実践力の育成
- ・ 児童理解にたった授業の進め方と個への対応
- ・ 発達段階を考慮した児童生徒の心理的サポート

これらの自己課題を基に、同様の課題を持つ学生によるグループ(小学校2, 中学校1)を作り、グループ協議により個々の自己課題を共有させるとともに、グループの共通課題を検討・決定させ、お互いの情報・意見交換をしながら自己及び共通課題の追究ができるようにした。



【写真2 グループ協議の様子】

さらに、このグループ協議では、第3講以降の学校支援活動について、協力校担当者との面談時の質問事項や相談したい内容等についても検討させ、各自及び各グループで協力校担当者へ連絡して今後の支援活動の具体的計画を作成・実施していくように指導した。

## (イ) 第3～7講に相当する前半の学校支援活動

### ① 学校支援活動計画の決定

学生が協力校での支援活動を進めるにあたり、附属小学校では、教育実習担当の先生が学生全体の動きを統括して支援活動計画作成の世話をしていた。学生は、希望の学年に各学級一名ずつ配置され、担任の先生との打合せ

をして活動内容、活動曜日、活動時間等を決定した。

附属中学校では、教頭先生が学生全体の世話をしてくださり、学生は希望の教科に配置され、教科担任の先生の学級を中心に活動し、状況によってはその他の学級の支援活動も行えるようにして、活動計画を作成した。

大学の担当教員は、附属小・中の担当の先生、教頭先生と連絡を密に取り、学生の支援活動計画を週ごとに把握するとともに、メールによって学生とも連絡を直接取るようにして、計画の変更等があった場合にも学生の動静の把握を心がけた。

## ② 前半の学校支援活動の実際

協力校での前半の支援活動は、講義5回分の回数と時間数を最低限（5日・450分）としたが、どの学生も週2回程度、半日もしくは終日の活動計画を立てて参加しており、十分な活動回数・時間が確保された。活動内容についても、授業観察、授業補助及び補充指導、授業の実施、学級活動の指導補助、教材作成、学級設営や学級事務の補助、学校行事等の準備作業等、学生それぞれの課題や学校のニーズに合わせて多様な内容で支援活動が行われた。



【写真3 支援活動：授業補助の様子】

## ③ 学生による支援活動状況報告と学部担当教員の支援活動の状況把握・指導

各学生には支援活動が終わるごとに、右ページ表2の「学校支援活動振り返りシート」を記入・提出させるようにした。これにより、学生は常に自己や共通の課題、その時々が発見課題を意識しつつ支援活動を行い、追究状況を自ら

把握するとともに、今後の活動に見通しを持ったり支援活動の蓄積状況を自ら確認したりすることができた。

(表2 「学校支援活動振り返りシート」記入例)

平成22年	11月	18日(木)	曜日	支援活動	8:00 ~ 12:30
所属学部・専修等	専修 氏名				
自己課題	① 学級経営の具体的な指導法 ② 道徳・学級活動の指導法 ③ 生活面で問題のある子や特別支援の子への対応				
共通課題	学級経営に対する理解				
発見課題	子どもの心に届く指導の在り方				
支援活動	<p>朝の会・姿勢運動…正しい歩き方、姿勢など</p> <p>1時間目・生活・ケンカがおこったとき、周りの人の対応や「ごめんない」の言葉の大切さなど</p> <p>2時間目・国語・担任の先生がいらいらなため、自習監督をした。</p> <p>3時間目・体育・鉄棒、タイヤ飛び、かいていなど、子どもがそれぞれの目標に合ったように、</p> <p>4時間目・国語・「学校で見たものをよく見て書く」と、色、特徴、形を捉えて書くようにする。</p>				
振り返り感想	<p>・1時間目の時間に先生が生活指導をされた。ケンカが起これば、またとなく、周囲の人はどう対応をとるべきなのかなど、物陰に入った子を助けていた。「ごめんない」の言葉を使う勇気など、真実に話し、時には冗談を混ぜていた。1年生でも、子どもが納得できるように話せば、しっかりと心に届くのだなと見ていて思った。</p>				
次回計画	<p>(次回予定 11月24日(水) 8:00分～15:00分)</p> <p>授業中に、もっと積極的に子どもを支援したり、自分が授業するときのイメージを持てるようにする。</p>				
報告確認	支援教員(附属等)	1/19 (印)	指導教員(大学)	1/22 (月)	(印)

また、学部担当教員は提出された「振り返りシート」をその都度チェック・添削指導し、次の支援活動日までには学生が受け取りに来て、次の取組に生かせるようなサイクルを作るようにした。

さらに、学部担当教員4名で分担して、学生の協力校での支援活動状況を実際に観察するとともに、学生と直接話して指導をしたり附属学校の担当教員から学生の状況を聞いたりして、その都度「支援活動状況報告」を作成し、担当教員全員で各学生の活動状況が把握できるようにした。

(表3 「支援活動状況報告」記入例)

月/日	曜	学校	訪問時間	学生氏名	専修	支援活動の状況
12/1	水	附属小	14:00～15:00		家庭	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1～4日 先生</li> <li>・生活科の授業参観と児童の支援を行いました。</li> <li>・本年度採用ということで、終日担任の先生から学級経営について指導を受けているとのことでした。意欲的に活動しているようです。</li> </ul>
12/3	木	附属中	8:50～9:50		理科	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本日から期末試験の返却で、1～3年の理科のテストの返却や新え合わせ、問題の解説などの授業参観に取り組んでいました。</li> <li>・本人と話しましたが、本日で4回目で慣れてきた様子ですが、昨日、テスト返却をするので問題を解明しておきたいとメールで指示があったらしく、まだすべての問題を解明し終わっていません。質問への対応等に不安な様子でした。</li> </ul>

## (9) 第8講 中間報告会の実施

この報告会は、前半の学校支援活動を振り返り、自己課題や共通課題の追究状況をまとめて報告し合うとともに、今後の取組の見通しを持つことを主なねらいとして設定した。具体的な授業計画は、下記の通りである。

- 1 学校支援活動状況の把握
- 2 各課題解決の追究状況に関する振り返り
  - ・ 振り返りシートへの記入
  - ・ 発見課題一覧表の参照
- 3 各課題の分析・見直し
  - ・ 自己課題の追究状況の報告
  - ・ 共通課題の解決状況の報告とその見直し
  - ・ 発見課題に関する意見交換
  - ・ 支援活動のエピソード発表
- 4 協議内容の発表と今後の活動に関する意見交換
- 5 資質能力チェック表による自己診断
- 6 次時の予告（2/8の成果報告会等）

上記1の段階では、担当者が協力校を訪問した際に撮影しておいた写真やVTRを見せながら、学生たちの支援活動の状況を説明したり、質疑を受けたりして、全体的なイメージを捉えさせるようにした。



【写真4 中間報告会の様子】

2から4の段階では、「中間報告会振り返りシート」を活用して、自己課題や共通課題の解決状況、発見課題のとらえ、学校支援活動の具体的な状況、後半の支援活動への課題・見通し等について、個人及びグループで協議した後、各

グループの代表者が協議内容を発表し、それに対する意見交換を行った。授業担当者は、分担して各グループの協議に加わるとともに、各代表者の発表に対して、今後の課題解決に役立つような指導・助言を行った。

学生が、振り返りシートで各課題の解決状況を自己診断した結果は以下の通りである。

- 4：大変満足している  
3：満足している  
2：やや不満足  
1：不満足

評価項目	受講学生の平均値
自己課題の解決状況	2.44
共通課題の解決状況	3.00
発見課題のとらえ	3.00

この結果から、自己課題の解決状況は活動半ばということもあり、どの学生も満足する状況までには至っていないことが分かる。そこで、授業担当者として、現状を踏まえて具体的にどのような取組をしていくべきか、学生個々との関わりを持ちアドバイスをするようにした。この段階で、学生自らがとらえている自己課題の解決状況の記述をいくつか紹介する。

- 授業の展開に関しては、授業観察や実際に授業をさせていただき、だんだんとイメージが掴めているが、教材研究の仕方について、まだ学びが足りないという状況。
- これまでの支援活動を通し、個への対応の難しさを感じたので、今後その具体的な方法を学んでいきたい。
- 問題行動を起こした児童への対応は、上手くできたりそうでなかったりと、学べていない点がある。等

共通課題の解決状況に関しては、全体としてはある程度満足している状況にある。しかし、個別の記述をみると、今後取り組むべき内容等についても具体的にとらえられており、担当者としても、この点を押さえて助言をするようにした。具体的記述には、以下のようなものがある。

- 自己課題と重なるので、同じように解決に取り組んでいると考える。まだ、はっきりと自分の中で消化できていないので、今後も担当の先生にお話を伺いながら考えを深めていきたい。
- 教科指導中心で学級経営についてはなかなか見ることができていない。発達段階に応じた指導についても今後学びたい。等

発見課題のとらえについては、「支援活動に行く度に、新たな発見や気づきをすることができた」「授業についての発見課題はよく見つめられている。もっと視野を広げていきたい」等の状況を学生が述べている。学生がとらえた発見課題の一部を、以下に紹介する。

- 場面に適した子どもへの声かけと指導方法
- 教室の掲示について（どのようにするのか、先生の思い）
- 小学校1年生の学級経営の在り方
- 子どもの心に届く指導の在り方
- 児童が問題を起こした際、効果的に指導するにはどうすればよいか
- 個別指導と一斉指導の時間配分をどうするか
- 児童の言葉をしっかり聴くためには
- 授業中の生徒の様子から授業の展開方法を考える
- 学力の差に応じた授業の展開方法
- メリハリのある授業展開の方法 等

#### (I) 第9～13講に相当する後半の学校支援活動

中間報告会で確認した後半の支援活動についての見通しや改善策等を基に、各自の課題解決に向けた支援活動が行われた。（紙面の都合上、支援活動状況の詳細についての記載は省略する。）

前半と同様のスタイルで行ったが、必要に応じて学生自ら授業担当者に相談に来たり、数人で集まって情報交換をしたりするなど、前半の支援活動ではなかった積極的な学生の姿も見られた。

授業担当者同士も、学生の支援活動把握の情報交換を繰り返し、どの学生にも均等に接して

指導ができるように配慮した。特に必要があれば、オフィスアワーを活用して学生個々に連絡を取り、個別相談を充実させるようにした。

#### (ウ) 第14・15講 学校支援活動全体の振り返りと成果報告会

第14講では、前・後半全体の学校支援活動について個別に振り返るとともに、グループ及び全体での意見交換を通して、課題に関して明らかになったことや今後の課題として残されていることなどをまとめた。

その後、前期教職応用研究の「成果報告会」の様子をビデオ鑑賞して、その概要をつかむとともに、「私が学校支援活動から得たもの」というタイトルで成果報告ができるように、発表原稿・資料等の作成を行った。

本授業最終の第15講は、以下の計画で「成果報告会」を行った。

- 1 「学校支援活動成果報告会」の取組方等の把握、準備
- 2 テーマ「私が学校支援活動から得たもの」について、名簿順に発表する。（5分以内）
  - ・ 相互評価シートへの記入
  - ・ 意見交換
- 3 講評 ・協力校の先生方
- 4 自己評価シートの記入
- 5 総括 ・学部授業担当者



【写真5 成果報告会の様子】 ワーポイントを使ったプレゼンテーションを行うなどの工夫も見られた。また、発表者以外の学生は「発表態度、分かりやすさ、発表内容、参考になった事項、感想」等を評価項目とした「相互評価記録簿」に記入しながら発表を聞くようにし、発表後の意見交換に生かすとともに、自分の今後の取組の参考にもできるようにした。下表は、そ

成果報告は、今後の課題も含めて1人5分以内で発表するようにした。発表に際しては、資料の配布やパ

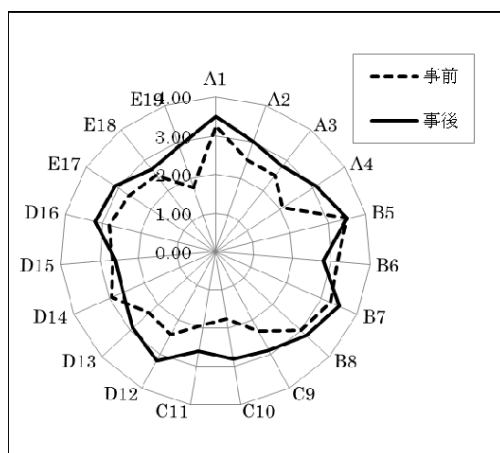


の具体例である。

No	評価項目	発表者氏名
1	発表態度	A (優秀) B 概ね良好 C 工夫の余地あり D 改善すべき
2	わかりやすさ	A わかりやすい B 概ね良好 C 改善の余地あり D わかりにくい
3	発表内容	A 充実していた B 概ね良好 C 改善の余地あり D 内容不足
4	参考になった項目すべてをチェックする。	<div style="display: flex; flex-wrap: wrap;"> <div style="width: 50%;">                     (A) 児童・生徒の支援活動やかかわり                      (C) 学校への貢献度                      (F) 観察眼の鋭さ                      (I) 参考にした態度                      (L) その他( )                 </div> <div style="width: 50%;">                     (B) 担当教員とのかわり                      (E) 気付きの素早さ                      (H) 情熱や意欲                      (K) 発想の豊かさ                      (J) 専門性の高さ                 </div> </div>
5	感想等	「支援活動、行動が、人々を助ける力になる。」「助けた時に、自分が成長する。」「(支援活動を通じて)自分自身が成長する。」

授業計画の3の講評では、両協力校の3名の先生方においていただき、学校支援活動の実際の状況や成果報告会の内容を踏まえて講評をいただくとともに、今後教師となる学生たちに参考となる具体的なアドバイスをしていただいた。

4の段階で、1講で取り組んだ19の資質能力に関する評価シートと同じ項目で、自己評価をさせた。以下のグラフは、受講者全員の平均値を支援活動の前後で比較したものである。



【グラフ1 支援活動前後の自己診断比較】

このグラフから、教員として身に付けたい資質能力全般について、事前より事後が上回っており、学生個々が必要な力を身に付けつつあると自覚していることがうかがえる。B6の「連携協働力・自己改善力の育成」に係る「学校と家庭や地域社会との連携の在り方」及びD14の「構想力、展開力、評価力等」に係る「教材分析能力、教材研究に基づいた授業デザイン」の2項目が、事前より事後の評価が低くなっている。これは、今回の支援活動では、保護者・地域等との直接の関わりが少ないことや、教育実

習との違いから授業実践そのものの機会が時間的にも確保できなかったことによると考えられる。

#### (h) 評価(単位認定)について

評価は、学生が設定した学修目標に照らし、これまでの学習によって蓄積された資料やワークシートの記述、学校支援活動や話し合い等の観察、成果報告会の内容等により、量的・質的観点から判断して行った。具体的評価内容としては、「支援活動時間」「成果報告会」「支援活動ポートフォリオ」を中心として取り上げ、それぞれ点数化して評価するようにした。以下の表は、蓄積した資料等のポートフォリオ評価シートである。

教職応用研究 学校支援活動ポートフォリオ評価シート③					
カテゴリー	B 自己改善力	C 学習者理解	E 教科領域等	評 定	
具体的項目	B-8 自己改善力	C-9 学習者の心理・発達	E-10 各教科内容等の理解・技能		
評価基準	自己課題や共通課題、発見課題の3つを整理し、支援活動を通して自己の改善や成長、課題などを明確にとらえ、改善につなげることができたか。【10点】	学習者に対して十分な理解や配慮をもって接することができたか。【10点】	支援活動に取組ながら内容や技能など、各教科内容等の理解や成長などの対応ができたか。【10点】	合計 / 40点満点	
受講者	観 点	観 点	観 点		
1					
2					

## 4 実践のまとめ

平成25年度から全面実施される教職実践演習(教職応用研究)のEコースについて試行的実践を行ったが、本科目の目標に沿って、学生の課題設定から学校支援活動の在り方、評価の考え方・方法等についての授業構成のモデルを示すことができた。今後も、学部担当教員相互や協力校担当者との連携を深めながら、学生の持つ課題や学びのニーズに細かく対応していけるような授業運営を心がけていく必要がある。特に、課題追究に有効な支援活動の設定方法、支援活動中における課題解決状況の見取り方等については、今後さらに実証的に研究していく必要がある。

また、平成25年度からは、現在15回で実施している授業内容を8回で行う計画であるが、その場合の実施方法やその運用が妥当であるかの検証も進めるとともに、本実践の方法等を活用した他コースの試行的実践も行っていく必要がある。

#### 【参考・引用文献】

「文部科学省特別研究経費事業成果報告書」平成21年3月 鹿児島大学教育学部

【資料 オリエンテーション・ワークシート】

平成22年度 教職応用研究（後期）	
学部・学科（専修）・学年	
氏 名	
※ 別紙19項目の資質能力の自己評価等の結果に基づいて	
1 学校現場に出た際の自己課題を明確にしてみよう。	
自己課題1	
自己課題2	
【附属での学校支援活動を中心にするグループ】	
2 1も考慮しながら、今期、自分が追究すべきテーマについて、記入例を参考にしながら第3希望まで記入しよう。	
具 体 的 な テ ー マ	
<b>【記入例】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 個に応じた1単位時間の授業の進め方はどう取り組めばよいか。</li> <li>・ 単元の指導計画の立て方はどう取り組めばよいか。</li> <li>・ 生活面で問題のある子どもへの対応はどうしたらよいか。</li> <li>・ 道徳（または学級活動）の指導はどのように取り組んだらよいか。</li> <li>・ 朝の会や帰りの会の話（学級通信の内容等は）はどのように構想したらよいか。</li> </ul>	
第1希望	
第2希望	
第3希望	
【ボランティア活動を中心にするグループ】	
3 1の自己課題及びボランティア活動の内容等を考慮しながら、今期自分が追究したいテーマについて具体的に記入しましょう。	

6 共通課題等解決のための手だて					
共通課題					
研究テーマ					
共通課題解決の手だて					
7 今後の見通し（学校支援活動の在り方）					
月					
	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 50%; text-align: center;">追究の方法やまとめ方</th> <th style="width: 50%; text-align: center;">学校支援活動の計画</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="height: 150px;"></td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	追究の方法やまとめ方	学校支援活動の計画		
追究の方法やまとめ方	学校支援活動の計画				

4 決定した共通課題とグループ構成、役割分担			
【グループ名】			
【共通課題】			
班			
員			
司			
会		記 録	
5 自己課題等解決のための手だて			
自己課題①			
研究テーマ			
自己課題解決の手だて			
自己課題②			
研究テーマ			
自己課題解決の手だて			
自己課題③			
研究テーマ			
自己課題解決の手だて			